

地理の上では、われわれ（九州と日本）は、遠く隔たつてゐる。しかし、政治的経済の上でいふことは、われわれは、これ以上ないほどに、われわれは双方ともに、開放性（通商と秩序）にかけられた国際秩序と自由貿易を固く信じている。われわれは双方とともに、自由民主主義、人権、法の支配的価値を共有している」

去る7月17日、安倍晋三首相は、訪日中のドナルド・トランプ大統領と、EUのヨーロッパ委員会委員長トマス・モルゲンツウル、EU理事会専務委員長アンドリュー・ハサウェイ、EU委員会委員長アンドリュー・ハサウェイ、EUの経済連携協定（EPA）に署名した。

それ故にこそ、トウスク議長の記者会見での発言の中でも、「関税戦争、激しい言葉、無責任」としてが本当のリスクだ」といふ件は多くのメディアでも強調されて報じられてゐる。それがトランプ大統領の言動を念頭に置いているのは、明らかであるからである。ただし、トウスク議長の発言の中でも最も重要なのは、前に触れた「欧洲と日本のは、地理上は遠く隔たつてゐるけれども、政治上、経済上では近い」という件にこそある。そもそも、明治以降の150年、日本にとっての対外関係上の

「保護主義の動きが広がる中、日本とE.U.が自由貿易の旗手として世界をリードしていくために」という安倍首相の言葉は、トランプ大統領登場後の保護主義機運の隆盛の中で、日本の立場を表明したものです。そのとしては、誠にさわいもの

大義は、「西歐世界に伍する」ことについた。悲願だった「対等な交易権」福澤諭吉が「文明論の概略」書中に残した「今世界の文明を論ずるに、欧羅亜諸国並に亞米利加の合衆国を以て最上の文明国と為し、土耳其、支那、日本等、亞細亞の諸国を以て半開の國と称し、」の記述を踏まえれば、その「文明」の域に達する」とこそが、近代日本の至上の大義であつた。

「保護主義の動きが広がる中、日本とE.U.が自由貿易の旗手として世界をリードしていくべき」という安倍首相の言葉は、トランプ大統領登場後の保護主義機運の隆盛の中で、日本の立場を表明したものとしては、誠にさわいものである。

「日欧EPA」樹立の意義は何か



東洋学園大学教授

櫻田 淳

第二次世界大戦後には、高坂正西（国際政治学者）が日本を「極西の国」と呼び、梅棹忠夫（生態学者）が「文明上、日本に近い者は西欧である」という仮説を提示した。それは、特に昭和初期以降の「アジア闘争」の失敗を経て、日本人々が「表面的な國力だけではなく、「文明」に内包された価値意識の上でも、西洋世界に近い存在になる」と再確認した事情と軌を一にしている。

主主義といった価値意識も、歐洲では決して盤石ではないか。た。したがって、世界では決して盤石ではないか。た。

現在では『二千五百年史』、『新日本史』といつて史書の著者として名を残す竹越與三郎は、その著『旋風裡の日本』書中、往々世界史的な価値意識の動搖の如きと、日本がファシズムになだれ込む流れの中で次のように記した。

「歐洲大戦の後を経て世界は、今や動盪混亂の最中である。」

そうであるならば、今後の日本  
が取り掛けるべきは、トウスク議長  
の発言にある「開放性と協調と秩  
序とに裏付けられた国際秩序と自  
由貿易、自由民主主義、人権、法  
の支配的価値」の擁護に際して、  
竹村の記述にある「狼狽も失神も  
せず自信を以て毅然として邁進す  
る姿勢を貫徹する」ことでしかな  
い。  
それは、平成の次の時代、そし  
て「明治200年」を展望する上  
でも大事な」ともある。(やくひた  
じゅん)

改正の表現に精力を費やした明治日本の指導層が、百数年後の本が歐州世界と「対等な交易権を樹立する光景を目にしたら」、と思うのであるか、想像力によるに足る慧眼を持つ。そして、トウスク議長の件で言は、そつとした日本の永きに沿うて、「自画像」を歐州世界の最高階級者たる立場で肯定した。その義は甚だ大きいことであつ。明治150年の正しい歩み示す

明人は、必ずしも、その國家社会を再建するのであつたことは、余の信じ難いところである。そして再建せられたる文明の大建築は、依然として所謂資本主義の文明であつたことも、また信じ難い所である。それは歴史の示すゴールであるからである。

：決して狼狽してはならぬ。決して失神してはならぬ。自信を以て毅然として邁進せねばならぬ

日欧EPA締結が象徴する日欧関係の現状は、「明治150年」の歳月における日本の歩みが正しきものである。

2018. 8. 9